

昭和

二十四年  
四十八年

七月二十三日

第三種郵便物認可  
發行(毎月一回・十五日發行)

(通第二八四号)

# 慈

# 光

第二十五卷

第一号

## 次

## 目

諸の如来と等し(二)……………	近角常観……………	先生……………	白井成允……………	(1)
老年問……………	題……………	柳瀬留治……………	憲……………	(13)
宿縁……………	高原……………	中島彰悟……………	相……………	(15)
住田智見師語録……………	中島彰悟……………	木村無相……………	夫……………	(17)
念仏詩抄……………	木村無相……………	花田正夫……………		(19)
衆禍の波転ず……………	花田正夫……………			(21)

諸の如来と等し (二)

近角常観

善の欲しきはまた眞実が聞えぬ故

さてこれにつき、ここに皆様に是非聞いて頂きたい話がある。昨年大分に行った時、別府で大いに信仰の起ったところがありません。それはその時私は別府に行つて、真俗二諦の味わいについてお話しした。それは従来このお慈悲を聞かれるに真諦門の方では、どの様に悪くしてもおたすけと横着な頂きようをする人がいくらもある。そしてそれ等の人が、こう頂きた上は、俗諦の上では何処までも善くして行かなければならぬのであると、どうしてもわが身の善から手が放せぬのは、まだ本当に真諦門のお慈悲が頂けてないからじゃ。真諦門の方で「悪しくてもお助けである、こんな者でもお見落しがないのじゃ」と。軽いことに頂いているから。またもとの地金(じがね)が俗諦に出て、「この上はどんなにでも善くして行かんならんに、それが出来ぬ」という歎きが再び出て来ることになる。

流浪し、ようやく家政の整理をつけると、また帰つて、それを持って行って仕舞われる。如何な婦人も遂に辛抱がし切れなくなつて、子供があるのに、とうと離縁になつてしまつた。しかし久しく御法義に心掛けて居らるる方故、そうなつて居ながらも、自分が俗諦のやり通せぬことを非常に苦にしておいでになつたのである。

ところが、そうあるところへ、今の俗諦の行えぬところをそこをお見捨てないと聞かれたの故、非常にお喜び下された。ことに私の話の中に「陛下の御勅使が、百姓の災難を哀れんでわざわざお見舞い下さるに、こんな難儀な者のところへと言つて居ては、かえつてご満足下されぬ。その難儀なお前だから、捨て置けぬゆえわざわざ訪ねてやるのではないかと仰言つて下さる」というを聞き、この俗諦の守れぬ私故、これをお見捨てないのであるかと、人目に立ちていちじろしくお喜び下されたのであります。

仏のお慈悲はただ可哀相とあるだけか

ところがこれは昨年のごことであるが、昨年はお目にかかれなから、今年遭うてみた。遭うて私が一つ不審を起したというは、その婦人が非常に喜ばれて「私がこんなに喜ばしてももうお喜びますと、人様も喜んで下さりますけれど、人様はそんなに喜んだら、もとの家へ帰れそうなも

ところが如来の仰せはそうでない。「その俗諦のどうしてもまもれぬところが可哀相じゃ」と仰言るに、何時までも「出来ませぬ」が出て来るは、まだ本当に眞の仰せが頂けないからじゃ。しかるに仏は「汝共のとても出来ぬところを可哀相と見たのである。その俗諦の守れぬところが哀れでならぬのじゃ」と、この仰せが実に一応二応で無い。私がやればやる程出来ぬにつけ、行えぬにつけ、いよいよ益々その上その上と、飽くまでお見捨てない仰せであるために、遂に如何な私も、その広大な親切の下に頭がさがり、腹から満足させてもううて、日暮し出来る有様が、眞の俗諦門の味わいであるとお話ししたことである。

ところが其時ご来聴下されてあつた或一人のご婦人でありませぬ。当時すでに『求道』に告白がのつたのであるが、その御婦人のご主人が非常に放らつな方で、金が出来ると直ぐつかつて仕舞われる、金が出来るとすぐ清國に渡つたのだと言つて下さいませぬ……」と何となく言われたこの一言であるが、この一言が耳にとまり私は氣になつた。そこで私は「それであなたはどう思われるか」と聞いて見た。「矢張りどうしても帰れませぬ」と言われる。私は「それはなるほど信仰前はそうもあつたらうが、今では帰る氣が出来ぬか」と言うて見た。矢張り「どうしても行かせぬ」と言われる。私「いや、行かんならぬと強いて云うではなけれども、併し今となつてはあなたは心中に済まぬことだ、帰るべきことだと思わぬか」と言うてみた。矢張り何処までも「出来ませぬ」と言われるばかりで、どうも其の出来ぬところが可哀相とあるお慈悲の方が、まだ不十分なところがあるように思われてしょうがない。

それから段々話がひどくなつて来て、最後に私は「あなたは自分は帰らぬけれども、この帰れぬところを可哀相だと仰言つて下さるのだ、というるだけで満足して居るのじゃ無いか」と押しつめた。すると余り私がひどく云うもの故、もう向うは笑つてしまつて「先生が仰言るところはよくわかつて居るのです」と言われる。後にはもう言葉がなくなつて「私のような奴は到底信心いたしたいなど言えませぬ。俗諦門が出来ないのですから」など言われる。「世

間では大方そう思うのでしよう。主人が私に不実だから、私も不実していると、そう思うのでしよう」などと言い出される。益々もって私にはよろしくなくなつて来た。

そのうち私の話がよいよひ、どくなつて来たものだから周囲の人が皆「先生は事情をご存じないからだ」と、見かねて弁護をせられるようになって来た。周囲が弁護されればされる程、私の方はよいよひどくなつてくる。そうなる私の方もどう云うのか、一寸見当がつきかねる程になる。ことにその方が、女ながらも頭が明晰で、能くテキパキと「私は俗諦門が守れぬのが苦になつて、くししようがなかつたのに、それを哀れと仰言つて下さるお慈悲とうけたまわり、有難くて、く」と仰言るのを聞くと、一寸考えるとは何処に悪いところがあるのかサッパリ分らぬ。そのうちにあたりの人が皆向う側になつて仕舞うて、私が誤解でもしてゐるようなことになり、私の方がかえつて立場がないような有様になつてきた。

とう、翌日になり、最後に私の方が何を云い出したかというに「一体昨日からあれ程までに私の方から云うに、これに対するあなたの昨日からの聞きようが気に喰わぬ。私の方は、去年あなたが私の話で喜ばれたからこそ話していい。これには其方も非常に驚かれた様子であつたので、私は「仏のお慈悲は、私の不実がただ可哀相と言つて下さるだけなら、唯一応のお慈悲であるも、その不実が捨てられぬすてられぬで、そのため五劫永劫のご苦労があるのでないか。如何ほど不実な私であっても、その者に對し飽くまで捨てぬとある仏の御真実であるのでないか。あなたのでは唯不実が哀れと言うだけで仕舞いに居られる如來様になつてゐる」とお話した。

そのうちに其方は泣いて仕舞われて、もう物が言えなくなり、その日はそのまま帰えられたのであつたが、翌日来られた時は、はや様子がすっかり變つて居られる。申されるには、「全く私が悪うございました。第一仏に對して申訳けなく、第二には一昨日来私に對し、先生のかく仰言るは、私の頂いてるところを先生がご存じないからだとはかり思つていました」と、語り、深くお喜び下されたのである私も「なるほどそうであつたのでしよう」と申し、共に喜ばせて頂いたことであつたのであります。

### 不実の奴が不実の儘で居られぬようになる

私もあとで思い返すと、随分思い切つたことを申したものである。しまいはこんなことまで申したのであります。或る、病氣の主人を持った女があつて、とう、世話が仕

るのに、そのことならもう分つてるといふ聞きようでは、ちとひどすぎるじゃないか。去年のであなたも本當になつて居るなら何も言やせぬのであるけれども、万一本當に御信心が徹して居らぬ時は大騒動と、案ずればこそ私の方は言うてゐるのでないか。しかるにあなたの前日からは、失礼ながらしつくり私の話を聞く態度になつて居らぬ。本當に私の話が分つてゐるなら、如何にもそうでござります」と、下から受けて出てもよきそうなものではないか。しかるに昨日から私の方は生命がけて、これ程多くの時間を費して言うてゐるに、あなたの聞きようはよろしくないと、とうど向うの言葉を押えつけてしまつた。

すると向うも不審が立つたやうで「そう仰言られると、何やら今までお慈悲のことを浅く頂いていたやうであります」と言い出された。そこで私「昨日から私の方から何か言うと、あなたはテキパキお慈悲のことを言われるけれど、しかし何時も最後は私に俗諦が行えませぬ、しかし行えぬのをあわれと仰言つて下さるお慈悲とうけたまわつて」といふのがあなたのだん詰りになつてゐる。するとあなたのは、ただ可哀相と語りて下さるだけなのか」と突きとめた。

切れなくて、主人をよそへ捨てに行つた。或時女が自分の家の石垣を崩すと、一匹の守宮(やもり)が居つて、頭を釘づけにされたまま生きて居る。よく見ると幾年前かに釘づけにした守宮なのに雌の守宮が始終側を離れず、食物を取つて来ては与えていたため、幾年かを生きて居つたのである。その女はこれを見て心に深く前非を悔い、主人を連れ帰つて最後まで世話をしたという話がある。世の中には現にこんな話さえあるではないか。この話をあなた今誰の身の上と思つて居られる、とこんなことまで申したのである。あとで聞くと側で聞いていた人が、皆はらはらしたと云うて居られた。こんな話を決して外の人にならしないがその方なれば、私の前に頭を下げ、最後まで聞いて下さることを知つて居るから、言えたのである。ところが案外それが当たつたのであります。

そこで皆さんに、肝腎なところは、私共は不実であるがその不実を哀れと言つて下さるのだけで止つて居つては何にもならぬのである。私共のその不実が可哀相で、最後まで、その者が捨てられぬのが仏の広大なお心なれば、今までの不実が実に申訳けなき根本となるからこそ、今更かえられるか帰えられぬは第二として、とにかく自分が出て行つたのは申しわけないあやまりとなつて来るのである。と

ところが、これがこの方ならこそ能く聞いて下さるのであるが、これが中々世間一応だとわからぬ。一応自分がよいことが出来ぬをやるせなく言うて下さるぐらいのところですましていと、矢張り自分はよく行えないが、行えないのがすまぬ処じゃぐらいのところを片つけて置くようなことになる。

するとこの時、話の中に色々の例が出たのである。よく浄瑠璃にいう壺坂寺の沢一が、妻に気を措き、崖から身を投げた話である。ところが沢一の女房にする時は、主人が目が見えぬばかりに色々自分を疑い隔て、遂に落胆してそんなことまでする、それが気の毒でならぬからどうしても主人を捨てられぬのが妻の真実である。故に主人が飛び込んだと知ったら、自分もあと追うて一緒に飛び込んでしまふた。すると思いがけなく御利益で、二人ともよみがえり、主人は目があいて始めて疑いが晴れ、妻の真実に泣き伏したというのである。即ちこれが一方の不実がどうしても捨てられぬという真実の有様である。かく私が目が明かぬばつかしに色々と仏を疑い隔てている、それが哀れ不憫で如何にしても捨てられぬとあるが、仏の広大の真実でましますのである。

さればとて實際上帰れる事情が開けて来るや否やは分らぬも、帰れる帰れぬにかかわらず、心の方がこれで開けてきた。

それまでは、第一に帰る気が無くなって居られたのである。気がないのは仏のお慈悲を、そらして聞いて居られたからである。ところがひとたびここが分って来ると、先きにいう皆が向う側になって弁護せられる程、それ程世間上の理屈には富んでる事情なのに、世間の理屈は信仰上の理屈にならぬ。たとえ世間万人がよいと言うてくれても、自分がすまぬから——即ち今まで結局自分の我儘を立て通したため色々の事情になったのであるが、そういう不実を飽くまでお見捨てなき広大の真実に遇い、目が醒めたから自分が不実なままで居られぬようになったから、自分の方から謝りて帰ろうという気にもなって来たのである。でひとたびこのお見捨てなき御真実なることに気がついて来られると、もうあとは云わなくてもよい。それ程やかましく言うておきながら、一言「分りました」と云わるるなり私はもう何も言やせぬのである。後に福岡へ行った時、この話をしたら果して信仰上非常な動搖を与えた。後に門司までついて来て聞かれた人が出来た程である。果して信仰が徹しているや否や、ここが最も大切なところである。

するとここで自分はかく不実でしようがないが、それを向うは可哀相と言つて下さるのた有難いで、いつまでも自分はず不実で失望しきつて居るだけではしようがない。これははじめの夫人を先き立てられた方の上でいう時は、往かれた方の思召しは、「自分はかくお慈悲一つで満足して往かせて貰うから、あなたもこれ一つはどうか頂いて下され」とある。かえって死にゆく人が、ここ一つを頂いておくれとの心となる。そういうと誰しもそれじゃとて人生の別れじゃ悲しいはしようがないとなるのであるが、ただそう云うて悲しむばかりであるのはまだそういう自分に対する向うの言うてくれることがわからぬからじゃ。ところがかく言うて自分の方は不実に過ぎ去っている、その私の不実の様がいよいよ可哀相で捨てられぬが仏の御真実と、この飽くまでお見捨てないお心を聞く時は、遂に如何な私も謝りはてて、真実にならずに居られぬが、遂に私が真実になるまで真実にして下さる仏の御真実である。これが実に真宗の俗諦門の出で来る根源なのである。これなればこそ

罪障功德の体となる、氷と水のごとくにて

氷おおきにみずおおしきわりおおきに徳おおし

ここ一つが肝腎なのであります。

でここを話したら、今の御婦人もとうと分つて下された

### 人生に眞実の立場が出来てくる

また福岡ではこういうことがあったのであります。ある医師の方で非常に理想家の人が慈善病院を開き、医界の弊風を挽める目的で熱心に経営して居られた。ところが考えは善いの中々その通りにいかぬ。五人共同してやつて居られたのであるが、矛盾が出て来てしようがない。

「もう今までやつて居たことがいよいよいかぬから、どうしたらよいか。人のすることも自分のすることもみな偽りと分つて、もう何ともしてみようが無い、どうするか」と実地の問題につきてのおたずねである。これが大変よい問題なのである。

ここで大低は、いかぬと「しからはやめる」という解決になり易いのである。これならみんなが大変やりよいのである。しかし私はそうは云わなかった。仮りに止めるとすると直ぐまた次にあなたのなさる仕事は何になるか、矢張り不実でしようがないではないかと申したのである。しかれば矢張り今迄通りの事業を継続するとするか、それでは不実々と云いつつ、なお不実を続けることになる。大低の人が皆このどちらかになっている。今までやりそこなつたから、この次ぎはくくと、これになってあるが、どれだけやりてもいかぬものはいかぬのだからと、何時までもいかぬことに腰掛けているか、このどちらかになっている。

そこで私は申ししたのであります。

「今あなたが不実でいかぬからと、止められても矢張り不実である。また不実でも仕方がないと、続けられるとお不実である。即ち行くも死せん、とどまるも死せん、一種として死をまぬがれずである。しかるにどうかというに今ここにその飽くまで不実きわまる者に、その不実極るが可哀相で、飽くまで捨てられぬとある仏の真実がましますというこの一事である。私の方はどこまでも不実だらけその不実だらけが如何にも可哀相で捨てられぬ思召し、仏の御真実である。〃いやどれが捨てられぬと仰せられても不実は矢張り不実故しかたがない〃と云えば、その不実が可哀相ゆえなおのこと捨てられぬとある仏の御真実であるために、遂に如何に不実な私も、不実を続けようとしても最早や続けられなくなり、謝りはててそのご真実をいたたく一念に、ここに初めて人生に真実の立場が出て来るのである」

ということをお話したのである。

こは私共は実にこれ程不実な有様なのである。往くも死し、とどまるも死し、帰るも死し、止めても不実なれば、そのままにしておいても不実である。どちらしても不実より脱れられぬ、何ともして見ようなき私共である。しかる

しかるにこの不実我慢の私の根性を見て下されたばかりに、それをお見捨てなく長々の御心労と、これに腹ふくらせて貰うと、ああよくもこれ程しぶるとき、これ程不実な私であるために、わざわざ現われて下された為物身（いもつしん）、実相身（じっそうしん）の仏の御姿かと、はじめてその広大のご真実の前に我慢が折れて、私の不実が不実のまま最年や通うされなくなる。ここが始めて人生において如来の真実に打ちあかされ、頭の下がった味なのである。以上は大分複雑したことを、くだく申したのであるけれども、今度はここ一つに力を入れ、到る処で喜ばせて貰うて来たのであります。

（大正三年、求道十一巻第五号より）



に仏はその不実を哀れのお慈悲であるからと、その不実のまま謝り果てるは、不実の看板をかけて安心している者に過ぎないのである。

ところがそう云うて私共が徹頭徹尾不実に行っている、その不実の様に目をつけられて、飽くまでその不実にお果れなく、最後まで真実にして下さる仏の真実と、これに一念気がついて来た時は、ここにはじめて徹底味、決定味はこれから出て来るのである。はじめに申した『華嚴経』の、「この法を聞いて信心歡喜して疑いなき者は、速に無上道をならん。諸の如来と等しとなり」の味わいは、ここから出て来るのである。

かく徹頭徹尾不実の私を、これを捨てて下さらぬのが、実に大悲の真実である、と一念ここに夜を明けさせて貰うと、その広大の仰せを遠うからお聞かせにあいながら、今日までうかうかして、いよいよ御手数をおかけしていた悪しさが、いよいよ私の悪いところである。かく徹頭徹尾私共が不実なばかりに五劫永劫のご苦勞をさせ奉り、それ程御心配かけさせたは、全く私のこの不実一つのためとなる、今まで世間が不実であるの、自分がどうもならぬのと世間を当てにし、自分がどうにかなるもののように思うて居ったのがそもそも根本の間違いであった。

### ゲエテの言葉

人々は平凡な作品を喜んでいいることはすこしも不思議でない。それは、そういう平凡な作品に対していと興奮もせず氣楽に読めるからだ。一体自分と同等な者と対している時に愉快な感じを得るものである。

老人は最大の人権の一つを失うている。即ち最早自分と同等のものから批判されることがないということ。

常に現在を離れてはいけない、各々の瞬間は永久というもの、その面影である、従って無限の価値がある。

人は他人からあざむかれるものではない。自分で自分をあざむくものである。

自分の身は小さく限られたものであるとよくわきまえた人は最も完全に近い人である。

人は他人の口を止めることも防ぐことも出来ない。ただ他人が言うにまかせておいて、自分でやるだけのことをするより外ない。そうすればついに口の方が負ける。

# 近角常観先生

白井成允

東京における私の聞法のおもいでは、近角先生から勧められて『歎異抄』をひもといた時にはじまる。はじめてひもといた時に、私はこの書の中の「浄土の慈悲」という言葉に心奪われた。

「浄土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて大慈悲心をもておもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり」

「浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだいづれの業苦しめりとも、神通方便をもてまず有縁を度すべきなり」

これらの言葉によりて私ははじめて仏教に言われる浄土という処の不思議な徳を思わしめられた。神に召されてキリスト教の天国に昇っても、私は、現に審かれて地獄に苦しんでいる母をどうすることもできないのに、仏教の浄土は、其処に往く者をして仏の覺りを開かしめ、仏として永遠に無碍に活動することを能くせしめるのであるから、私

を開く、この一事、是れこそ人生の究竟の理想である、此の為にこそ私は生きるのだ、—この思い、この望みを私に醒めさせてくださった新しい東京の師友を、私はいくらか感謝しても感謝しきれない、今は先ず近角先生の追憶から記しはじめる)

然るに先生の追憶を先生にお別れもうした後一、二ヶ月の頃に記しておいた小文が焼けずに今も残っている。今私はそれから二三の言葉を加減するばかりでそのままに抄録する。

「……何のために生きるのかという久しい疑いはおのずから解けて、ただ浄土に生まれるために生きる身であると思われてきた。それならば如何にして浄土に生まれ得るか。ただ信心一つに由る。私は信心を得ねばならない。こうして私は信心を得んがために日曜毎に先生の御法話を承ることに努めた。しかしそれは極めて難しい事であった。先生のお話は何時聞いても同じ事である、同じ教を同じ一つの先生の実験と、同じ二三の譬喩とで繰返し語られるばかりである。私はそれを聞きおぼえてわかってしまったようでありながら、しかも如何にしても真には聞き抜くことができない、信心が得られない。焦燥しながら思うよう、此は私が不真面目であるからだ、もし一日でも真面目に

は浄土の徳におさめられて必ず仏の覺りの中に母と共に相見ることが出来る。このおもいは、何よりも先に、私の心に入って、私に限り無き望みと慰めとを与えてくれた。私は是の如き慈悲深き仏の教を聞くことに喜悅を覺えた。

然しおもうがごとく衆生を利益するとか、有縁を度するとかいうことは、浄土の徳として仏の覺りを開かしめられた時の事である。其の如き徳の証される境は、ありがたうとうとくなつかしいけれども、私共は如何にして其の如き境に到り得ようか、即ち浄土に往生することが如何にして可能であろうか。私は、日々『歎異抄』を読み、日曜ごとに概ね求道会館に参って近角先生の法話を聴くことに励んだ。其によって浄土往生の道が明らかに示されるのだと思つて。

(この思いは、人生の理想を見失い、人は何のために生きるのかを疑うて迷っていた私の心に、ともかくも新しい道の示されてきた事を意味する。浄土に往生して仏の覺り得られたら信心が得られる筈である、私はどうかして真面目にならなければならぬ、真面目になって御教を聞かなければならぬ。しかし真面目になるといふことは何という難しいことであろう。私は日曜毎に今日も亦真面目に聞きとおすことができずじまつたという歎きを繰返しながら、それでも先生の誠心一つに捕えられ、先生の涯も無く和やかにして上も無く巖そかな徳に懷かれて、御教を聞かすにはおられなかった。

先生の御法話の後には往々座談会が開かれた。その席では信仰の告白だの求道の質疑などが為された。質疑に対する先生のお答は懇切丁寧を極め、質問者の問おうとする所を却って先生の方からあらかじめ見抜いて深い同情を注がれ、厳しい批判を下されるのであった。話が徹しなるとなり、先生は信の灼熱せる鉄塊とでもいふべき姿となり、畳をたたき膝詰めに攻め寄ってこられた。質問者は自らどうすることもできない窮地に追い詰められて降伏するより他なかった。それによって多数の人々が疑いを除き信を獲得して新しい生活に入った。この入信の告白はしばしば法悦に歡喜踊躍する相を以て為された。ある日曜などには、先生の御法話が終つたら、突然一人の軍人が立ち上つて、自分は今まで仏法の話聞いたこともなかったのに、今日初めて先生のお話を承り、はしなくも仏様のお慈悲を知らせ

ていただいた、こんな不思議なことではない、と歎歎（きよき）しながら讃歎した。こんな尊い人々の姿を見るにつけても私は三年も四年もお聞きしながら徹し得ない自分の不真面目を歎いた。

遂に或る（夏期求道会の）座談会の席で私はもうたまらなくなつて私の不真面目を訴えた、不真面目の故にいくら聞いてもお慈悲がはつきりしない、信心が得られない、その苦痛を訴えた。先生は溢れるような同情を寄せて告げてくださった……

君はもう久しく私の話を聞いているのにまだそんなことを云っているのか。君は真面目になつたらお慈悲が聞こえるのだ、信心が得られるのだと思つている。けれども、そんなことを私が何時語つたことがあるか。自分の真面目で仏様の信心を掴もうとでもしているのか。自分の真面目で掴み得るような信心ならば、それはまた自分の心と一緒にどうにでも移り変わるものだろう。そんなつまらない信心など得て何になるか。いったい君は真面目になつて／＼と思つているけれども、君が自分で真面目になり得るのか。仏様は君に向つて、真面目になれ、真面目にならなければいけない、など言われはしないか。むしろ反対に、仏様の御心では、君がいくら真面目になろう／＼と思つても駄目なのだ、とても真面目にはなれないのだ、真面目に

において此の極めて重大なことが、何時の事であつたのかも記憶に存せず、又その時ただちに信心歡喜という程に強い感激に入つたのでもなかつた。ただ確かなことは、その時まで焦り求めて来た心の煩悶がその時から解かれた、そして不真面目が気にかからなくなつた。不真面目な自分の姿が現われるとすぐにお念仏が現われてくださる。こういう如何ともすることのできないあさましい自分の苦惱を飽くまでも知ろしめしあわれみくださる御慈悲が南無阿彌陀仏と現われてくださる。これは今日の私にとつて——限り無くありがたいことであり、全く究竟の救いである。この私の永遠の生命にとつて上無き救いの道を私は近角先生の御誠めによつて開いていただいた。これ真に謝しても／＼謝し得られざる鴻恩である」

以上は私の旧年の文の再録である。これをお読みくださる方々には恐らく種々の問題が起こられるだろうと思つ、そしてその中の根本の問題として、私をはじめに心拘わつた浄土往生の願いが如来のやるせないお慈悲を聞くという事において如何に解決されたのであるかが問われるだろうと思つ。旧文においてそれに答える前に、私はそれに記しておかなかつた。先生の信仰を示されるためにしばしば語られた、二三の譬喩を思い出して記しておきたい。

（続く）

なれないのが君の本性なのだ、その本性がいかにも／＼可哀そうでたまらない、と言つて、君の真面目になり得ないその処に何処々々までも同情し、飽くまでも見捨てないと呼んでくださるのだ。真面目になつて信心を得よと云われるのではなく、君がどうしても真面目になれない者だと見抜いて、その真面目になれない君の姿にどこまでも同情して捨てず、必ず救わずには措かないと、かかりきつていてくださるのだ、仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられ、罪悪深重、煩惱熾盛の凡夫を救おうと願うてくださったのだ。君はこの本願を聞かずに、自分の思いで、全く逆の方に向いているのだ。

およそこのようなことをそのとき先生は厳しく告げてくださった。私はそれをお聞きして、今まで自分の思つていた所が全く逆であつたことを知つた。真面目になろうといくら努めてもどうしても真面目になり得ないのが自分の本性だと始めて眼をさましていただいた。こんな不真面目な者でありながら真面目になろうなどとすることが身の程も知らぬ甚だしい驕慢なることを覚えた。そしてかかる不真面目な者を不真面目なるが故に飽くまでも救うと呼ぶる無限のお慈悲こそ南無阿彌陀仏のおんこころなることを聞いた。

ただ私は極めて鈍感の性である。だから私の聞法の辿り

## 御 紹 介

正 信 解 私 解 白井成允著

定価 一、二〇〇円也 送料 一〇〇円也

京都市下京区堀川通花屋町 百華苑

振替 京都 二五七八八番

## （自序の抄文）

この書は正信念仏偈を拝誦して私の領解し得た所を記したものである。昭和三十九年四月号から四十五年九月号まで七年間自照誌に読者諸兄姉から励まされつつ筆を執つた成果である。正信偈は聖人が自の信心の精髓と其の展開の歴史の肝要とを述べて後世に遺し伝えられたものである。そこに人は何のために生き、人は如何に生きるべきか、という千古の疑問が深き思索と厳しき反者とを経て円かに答えられている。それらはすべて唯念仏の源泉から流れ出でたる聖人の生命の声である。人と生まれてはしなくもこの声を聞くことは無上の歡喜である。云々。

# 老年問題

柳瀬留治

私は今、仏文学家のシモーヌ・ド・セーヴォワール（サルトルの内妻）の書いた邦訳「老い」を読みはじめている、上下二巻からなり、その序文のはじめに

『仏陀がまだシツタル太子であった頃、父によって立派な宮殿の中に閉じこめられていたが、馬車に乗って近隣を散策するために幾度かそこを脱け出した。最初に外出した時、彼は一人の男に出会ったが、その人間が身体が不自由で、歯がぬげ落ち、皺だらけで、頭が禿げ、腰は曲がり、杖にすがって何かぶつぶつぶやき、全身がふるえていた。彼が驚くと、馭者が老人とは何であるかを彼に説明した。「何という不幸だろう」と太子は叫んだ「われわれ弱くて無知な存在が、青年特有の傲慢に酔って、老いに気づかないとは！ さあ、さあ家にすぐ戻ろう。遊びや楽しみなど何になろう、わたしは未来の老いの住家なのだから……」

仏陀は老人の中に彼自身の運命を見た、なぜなら、人

は不謹慎なのだ。……それだからこそ私はこの書物を書くのである……」と書いている。

さて年々に新年を迎えるのだが、人生のたそがれにおいては再び新しい夜明けが来ず、暮れじまいである。それこそ私にもまた諸子にも前途に厳然と立ち塞がっている壁、いな絶壁である。諸子は人のことだと概念的にしか感じられないであろう。或は自分にはまだ遠いさきのことだと思われ、実感とはならないだろう。だが気にかかる事はさきに解決さるべきである。借金は歳末に払って清々しい新年を迎えらるべきである。

諸子には「生きている中は楽しく呑気に老や死を考えずに行くんだ。ぶつかった時はその時のことだ、生き物はみんなそう生きているのだ」と思っているかも知れない。

しかし一般動物なら止むを得ないが、霊長と生れた諸子は、頭のたしかな中にこの嫌な問題の解決をされることを切望する。

○  
学者も社会人も、生物的人間観に立って見て居り、生物的に倒れてゆくのが当り前だとし、又それを問題にしての老人や病者への福祉施設も、生物的に成るべく楽しく、苦しませず死なせてやることを目的として、医薬や慰めや娯

間達を救うために生れた彼は、人間の境遇のすべてをわが身に引受けることを望んだからである』と書き出してある。十二月八日は仏家では「臘八（ろうはち）」と称してわが釈尊が菩提樹下で遂にわれわれを救う道を悟った「成道」の日である。「我は覚者となった」との宣言をした日である。仏陀とは覚者の意であり、人間の生きる悩み、病や老いの悩み、死に臨んでの悩み、すべてを救う道を悟ったのである。これによって我々すべてが人生の悩みから救われる道を得たのである。

本書は更に

『……アメリカでは人々は死者という言葉を語彙（ごい）から削除した。……老齢を連想させる話題を一切避ける。今日のフランスに於ても、それは禁じられた主題である。……このタブーを破った時、なんと酷い非難を浴せられたことか……老などというものは存在しない……社会にとっていわば耻部であり、それについて語るこ

楽を与えて、いわばひとり果てゆく苦しみや悩みを麻痺させて死なすことを最良の理想しているのである。

しかし我々は動物でなく人間である。死に臨むおのれの孤独な運命、そのやり切れない心持、それは諸子の前に待ち受けている。どう処するつもりか。筆者私は、そうした千萬無量の悲しみを汲みとり、悲憫の涙をもって迎えとり給う仏陀の大悲、これを光とし力とせよとの声を聞き、ただただ感泣し、如何なる死の運命にも安んじて瞑せむと決めている。諸子よ、共にこのみ声に従おうではないか。

（短歌草原、四十四卷十二号）

## 死を憶ふ 『檜稚葉』

死ぬべしとは理知の上のみまだまだと思ふ我情の老いて強かり

体おきて命消えゆくはかなさを御憐みによりてこそゆけ

師の書幅己が室としてあれど死にに後は散り失せぬべし

父の五十回忌を終へて

この夜頃疲れて眠り夢にだに父見ぬ久し逢いたきものを



## 宿 縁

高 原 憲

泉青があこがれのまどであった第一高等学校に入学したのは十八才の秋であった。この時ほど青春の誇りを感じたことはなかった。二条の白線に柏葉の帽子をいただいたときはまるで夢心地であった。

新学期の生徒控所はまた偉観であった。学友会各部の紹介の檄文で室一面に飾られている。陸上運動部、剣道部、端艇部などの檄文と来たら、すばらしい名言絶句で綴られていた。これを読んで感激せざるものは青年にあらずというに充分であった。

その中で妙に泉青の眼をひいたものがある。室の一隅に出ている小さな青い紙の掲示である。それは徳風会という小さな集りの会合である。近角常観先生を中心として毎週一夜、歎異鈔の講話を聞こう、有縁の士は来れ、という極めて地味なものであった。よし俺はこの会に参加しようと思心したのである。

これが聞法の第一歩であった。毎週金曜日の夜、雨の日

一年上級に加藤先輩がいられる。一高時代徳風会を世話していられた法兄である。加藤先輩は九大でも仏教青年会の世話をしていられた。その驥尾に附して泉青も青年会の世話をするようになった。毎週定期的のものではなかったが、毎年夏、仏教講習会を催すことが主となる仕事であった。泉青が主として事務をとるようになってからは、近角先生を講師としてお願いすることが多かった。「君そんなことはたいていにしろよ」と注意してくれた友人の親切に背いて泉青は一人で夏の講習会の世話をした。講師送迎、御宿の世話、会費徴集、立て看板、会場整理、中々忙しいことであった。

三年生頃の夏期講習会の時であったと思う。講習がすんで御宿である老館で先生に御揮毫を願った。真夏の暑い日、お疲れもおいといなく先生は達筆を振って左の一句を御染筆下さった。

晴弘誓強縁多生難値

真実浄信億劫難獲

遇獲行信遠慶宿縁

暉弘誓の強縁は多生にも値い難く、真実の浄信は億劫にも獲難し、たまたま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ、

三十年後の今日、この先生のお筆を拝見すると、ありし日の思い出にふけるのである。「遠慶宿縁」がしみじみと

も雪の日も、この集まりはつつけられた。赤門前から少しは入り込んだ処にあった近角先生の御住いである、求道学舎がその会場であった。学舎といってもきわめてお粗末なものであった。当時すでに傾きかかった古家で、外側から丸太棒で支えられていた程であった。その六畳あまりの一室である。集る者五、六名から多い時に十五、六名になることもあった。

一章ずつ輪読した上で、先生は淳々として説いて下さるのであった。そのあとで質問に花がさき、寄宿寮の門限に間にあうように黙々として散会するのである。先生はこの集りを決して休まれたことがない。青臭い学生相手に倦むこともなく道を説いて下さった先生の御親切が、三十年経った今日、はじめて頂かれるのであった。先生をとおして動いて来る切々たるお慈悲であった。

向陵三年の聞法を終えて泉青は福岡へ帰った。小学から中学まではこの地で過したのである。九州大学に入ると

聞法一路の思い出をたどると、いつも思いは少年の頃まで帰ってゆく。泉青は小学生の頃、暑中休暇になると田舎の祖父母のもとに送られたものである。ささやかな御寺である。お茶をすすりながら孫を相手に語る祖父の優しい姿は今だに忘れられない。河畔の螢狩りもなつかしい。また毎朝大きな饅頭のような形をした御仏飯にお茶をかけて頂くのもうれいことであった。今だに不思議なことは「証知生死即涅槃」の一句をいいたくと、いつでも一瞬にして当時の思い出が展開してくることである。夕暮れになると伯母さん達について御堂に参り、そのあと御内仏で伯母さん達があげる御経をききながら坐るのであった。その時から耳に残っているのがこの一句であった。この調子が異様な響きをもって少年の耳をうつつのであった。

○ 泉青はやがて定命に達せんとする。第一歩をふみ出してから聞法三十年。それは曲りくねったせまい路であり、道草を食い歩く牛の足とりでしかなかった。これからもただこの一路をたどるより外にすべはない。過ぎし三十年、何もかも我一人のためであった。遠く宿縁を慶ばねばならぬ何もかも我一人のためなりき今日一日のいのち尊し

『水の味』より

# 住田智見師語録

中島彰悟

日本の高僧に宗祖の名がのっていない、それ故一時は親鸞聖人は実在せないとまで云った学者がある。聖人はそれほど世にかくれた御一生であった。大地の水が不断に湧き出でて人の生命を救うように、満九十年の御生活は、みな私共に仏の眞実を伝えることに専念されたのである。

すべて人間は生きてゐる間に世に知られるような人は死と共に忘れられる。宗祖は八百年の今日ますます人の敬慕を深めてゐるのに驚くばかりである。

真宗で云う仏様は、有神論か無神論かとおたずねしたら一言のもとに

「それは有神無神を超越したる不可思議光仏である。我宗祖は他の祖師と大變相違してゐる。不可思議ということとはわからんと云うことではない。御徳が广大で思慮の及ばんことである」と。

この御慈悲に気がついたら、おのれ忘れて仰せに随うだけである。

(註) 念仏の雲にあこがれ にぎらんものと山の上  
しらずわれ いだかれてありしを

詠人 不詳

太陽が東に出たら、カンテラやランプの要はない。仏の眞実にあえば、自力疑心が取ずかしくなる。

わが身は罪深き浅間しきものと思へとは、自力を見限らしむるため、悪が往生の障りになるということではない。

瓦屋は鬼の頭を焼いて食う。さすが御僧じや、仏を煮て食う、と古き川柳にあると。空恐ろしいことではないか。

信じてみればすでに浄土界、故に仏を見る。獲信見敬大慶喜とある。ここに仏ましまさぬと思つてゐるのは信心がないからである。

善導大師の觀經の講義に、娑婆で念仏申すものは浄土の菩薩の仲間入りをしてゐる。もう一つは現に浄土にまします菩薩と二種の菩薩を説かれてゐる。

祖師が六十二、三の年に御帰落になつたのは、名利を捨てて一層本願の深遠なるを知らんとしてであらう。三十年間の京都時代に、尊い御聖教が沢山著わされて、末世のお互はそれがために導かれてゐるのである。

三度の隱遁と云うこと、これは御年九才に出家、二十九才吉水入室、第三が六十余才の御帰落である。隱遁とはかくれなさる意である。

学者と自任している人は数々あるが、宗学者でありながら仏様がどちらを向いておいでになるかを知らん者が多い。仏の向きたまう方向を知ることが大事な問題である。

こちらから仏を追うは自力の願生者。それでは何時までたつても安心出来るきずかいはない。逃げる私を仏が追いつめであることに驚かねばならん。

信よりすすむると、御廻向の品を忘れる。念仏は病人のためのお粥のようなものであるから、これを喰べながらこれを与え給う御親のお慈悲をよろこび本願におさめられるのだ。

宗祖の意は、称えることが救いの条件ではない。念仏の内容たる本願をとどけるために、我名を称えよ！との仰せで、これを信受して称える身になると念仏は仏徳讃歎となる。

念仏往生の願だけではない、誓願であるから、汝を助けるまでは後へ引かんの誓がある。誓のある行は念仏だけである。

仏の本願を聞かせぬ者は地獄や極楽のわかる気づかない。

地獄と極楽を一処にして無いと云うが、それは間違つてゐる。地獄は自分に造つてゐる、自業自得である。極楽は願力成就の報土である。信心の智慧をうると地獄も極楽も自覚するようになる。

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

この身にかかった  
おん仰せ

聞く一つ  
聞く一つ  
ナムアミダ仏と  
聞く一つ

ナムアミダ仏  
ナムアミダ  
ナムアミダ仏  
ナムアミダ

みんなみんな

西から来た人  
東から来た人  
北から来た人  
南から来た人

みんな出会った  
四つ辻(つじ)で  
ナムアミダ仏の

ミダのオココロ  
聞く一つ  
仰 せ  
一文不通の  
この身ゆえ  
仰せ一つの  
ほかはない  
〃称我名字〃の  
おん仰せ

四つ辻で

みんなみんな  
おん同行  
みんなみんな  
おん同行

まるまる

わたしに仏法が  
ミジンも無いで  
まるまる仏法さまに  
助けられるほかはない

〃弥陀の誓願フシギに  
助けられまいらせて  
往生をばとぐるなり〃

まるまる仏法さまに

たすけられるほかはない

ほかになんにも

この身このまま  
ナムアミダ仏

ほかになんにも  
無いわたし

わたしのしんじん  
ナムアミダ仏

ほかになんにも  
無いわたし

死

香月院ご講師の仰せに  
〃如来永劫のご修行は  
死の一字の中に

往生を全うして  
下された——〃

死の一字の中に  
死の一字の中に  
わたし

業のまま

死ぬばかり

わたし

業のまま

死ぬばかり

## 衆禍の波転ず

花田正夫

親鸞聖人は教行信証の行巻に

「しかれば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し速に無量光明土に到りて大般涅槃を証し、普賢の徳に遵(したが)うなり。知るべし。」

とある。弥陀大悲の本願の不思議なお力にたすけられて、撰取して捨てたまうことのない広大な光明のめぐみを蒙る時、自然に御名をたたえつつ、のがれ得ぬ一切の業報を身にうけて行くところ、罪障はおのずから功徳と転じて、さわりあるまんまさらがさわりとならなくなっていく。ここにはてしない生死の闇路に大きな燈火を頂いて、すみやかに光明無量の浄土に帰り、真実のさとりをひらくやいや、大悲無窮の大活動の新生活に入らせて下さるのである、との讃仰である。

さて「衆禍の波転ず」ということが私の心に刻まれたは

の導きをうけるようになった頃であった。当時すでに胃痛で夫人を亡くしていられた先生から、

「家内はかねてから仏法を大切に思い、真宗のすじ道はほぼ心得ていたが、まだ自分の問題とはならなかった。

ところが、どうも胃の加減がわるい／＼と売薬などを服用していたが、思わしくないので岡山県病院に出掛けて診て貰うと、すでに癌がすすんでいて、手の施しようもないということ、それとなく聞かされた。家内は思いもかけぬ病状を知り、気も動転するばかりであったが、その時フト、仏様の慈悲は、こうした私のためであったと気付くなり、真暗な心にあかりがさしてきて、自然に心の平静をとりもどし、動ける間は、老母のため、子供等のため、親戚のためとよく働きながら療養をしていたが、やがて念仏裡に別れねばならなかった。

こうしたことがあって、今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来世のさとのまえのえにしをむすばんとなり。われおくれなば人にみちびかれ、われさきだたば人をみちびかん。生々に善友(ぜんう)となりてたがいに仏道を修せん、世々に知識としてとみに迷執をたたん／＼の唯信鈔の聖語も文字通りに味わわせて貰った。そしてはじめて、衆禍の波転ず、ということを感じさせられた」と直接におききして、そういう尊いことかなあと、心に

じめは、少年の頃、寺の信徒総代をしていた祖父に連れられて、寺の花祭にお参りした時であった。御住職に案内せられて、本尊の安置された御堂に入り、その壁に掲げてあった積尊の誕生・成道・転法輪・入涅槃の御絵像をおがませて貰った事がある。ことに成道の積尊の御姿は、円光の中に静坐される仏と、その四辺に、成道をさまたげようと種々な姿の悪魔がむらがっていた。しかも不思議なことには悪魔の投げかける毒矢、利剣、そして火焰などが、一度円光裡に入ると、すべて転ぜられて、かえって仏を荘嚴する花となり清風と変っていることであった。

その後子供心にも色々と考えていたが、結局は、積尊のすぐれた徳を讃えるための象徴として仏弟子が描いたものであろう、と置いていた。そしてそのことはそのまま何時とはなしに忘れてしまっていた。

その後、伯父から歎異抄をすすめられ、六高で池山先生

刻まれた。

その後、池山先生は甲南高校に転任され、私は岡山医大に入った。また父も不如意の中に亡くなり、学資をM家から受けていたが、別にどうということも外面にはなかったのに、大学の三年の秋、精神的の行きつまり、どうにもこうにも動きがとれなくなった時、どうあろうとも御一緒して下さる大悲のましますことを知らされ、生れてはじめてありがたいなあ!と思わずつぶやいた。そして父の墓前にお礼まいりをして、帰る道々、淋しい秋の野辺も、百華咲きにおう春ののどかさと感じ、日誌の一頁に、

「過去はすべて感謝であり、現在は法悦であり、未来は光明である」

と書き入れた。そうした大いなるみほとけの慈懷にいだかれた喜びから、少年の頃、春に兄、秋に姉を失って自分の死を考えさせられたことも、父の死、一家の没落はよって知らされる浮世の風をつめたさも、そしてあらわになる隣の心等々も皆、はやく仏心のまことに帰れとの警鐘であったと気付かされた。

そして、成道の仏の尊像が、単なる象徴でなく、一人一人がその仏の心光裡におさめられる時、それは不思議な真実として味えることであると大いにうなずいた。

その後、京都大学に転学したが、青年期の私の煩惱の熾盛さ、さらに世間見すの失敗の連続によって、美しい理想の夢もまぼろしと消えて、仏法を語る資格などの何一つない身と知らされ、他人事よりも、自分自身の生活の上に聞かせて頂くことの大切さ、禪家の所謂、脚下照顧の道を辿らねばならぬようになった。それもあまりの煩惱の熾盛さに、どうしてもそうせずには生きられなくなったので煩惱様のお蔭であった。

また私に子が無いために、「親鸞一人がため」と聖人が常に仰言ったことを、親が子をかけがえなく思うように如来が私共を一人子のように思召して下さるのだとの池山先生の御言葉も実感として聞けませんことから、お蔭で、子の立場に立って親を仰ぐすべを知らされた。

更に、三十五才で肺疾で二年間職を離れ、終戦後の四十才になって心筋障害で外的活動を封鎖され、数年前から腫瘍、等々と病気続きで、友人の或者からは、病上手で死に下手だと評されるような始末であるが、愚鈍な私にも、肺疾によって、矢張り病氣するんだなあ!と氣づかされ、自由に旅が出来なくなつて、文字の尊さ、ありがたさに驚き、また、老病によって、死も亦我なり、と生と死をどちらも紙の表裏として受取るようにさせられた。そしてゲエテの名言「死後に光明を見出し得ないならば現在も暗

黒なり」も身にしむようになった。

あまりにも自分のことばかりを書きならべたけれど、これらの一つ一つも、私は私の業のままに、念仏申し／＼と聞かせて頂くところに、おぼえず知らぬうちに、衆禍が波転ずるの妙味を知らされ、我にして我ならぬわれの不思議なはたらきをありがたくいただいている。

罪障功德の体(たい)となる

こおりとみずのごとくにて

こおりおおきにみずおおし

さわりおおきに徳おおし

多聞淨戒(たもんじょうかい)えらばれず

破戒罪業(はかいざいごう)きらわれず

ただよく念するひとのみぞ

瓦礫(がれき)も金(こがね)と変じける。

無慚無愧(むざんむぎ)のこの身に

まことのころはなけれども

弥陀の廻向の御名なれば

功德は十方にみちたもう。

南無阿弥陀仏

ともしび

聚墨生

大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば  
至徳の風静かにして衆禍の波転ず

(教行信証)

念仏の人でドイツ語の教授であった池山先生は、身辺におこるあらゆる事象の中に返照する弥陀仏の徳光を常に讃えられ、私共がお伺いすると、いかにも嬉しそうに話して下さった。或はご自身の大病に際して、或はご子息の病床に、或はカナリヤや愛犬の動作の上に、又は歌謡曲の中にも、ことに不治の病を自覚されて念仏に深く帰入せられた清子夫人については、今生夢のうちの契りをよるべとして来世さとのまへのえにしを結び得たのは「衆禍の波転ず」との仰せ通りであったと深謝していられた。

尽十方無碍の心光に照護せられた先生の信の旅姿にふれると、仏の有無も、浄土の問題も自然に氷解して自然に念仏が浮かび、よき人にお会い出来た喜びがしみじみと知らされた。

(四十七年九月十日)

諸の苦惱を受くるは如来を見ざるに由る

(ソウカダ経)

かつて母と兄二人を相ついで亡くした私は愛別の悲しみに打ちひしがれた。その時、親切な慰問をうけると涙が出いかげんにあきらめよという人には腹を立てた。

こうしたことを繰り返していたある日、人様の言動に一喜一憂して動揺しているのは、人様に同情を求めているからである。一体私の人様の愛別の苦に今までにどれだけの涙を流したであろうか。私には人の慰めを受ける資格は無い身でありながら誰にもそれを求めているのは全く身勝手すぎると深く省みさせられた。

それぞれに重い荷物にあえいでいる人間同士で慰め救うことは出来ないから、仏陀は恩愛たち難い私共を悲憫したもうて、その解決の道を御自身に成就されて「わが名を呼べ」と大悲のみ手をさしのべて下さっているとフと氣づいた時、お念仏があふれ、愛別の涙はぬぐわれていった。

愛別のかなしみ深しふかけれどわがみ仏の涙きわなしとは其時の腰折である。

(四十七年十月二十九日)

# あとがき

年頭を念仏裡におよろこび申上げます。

歳目をまず訪づる念仏哉

念仏でまづすごさばや三ヶ日

池山先生の句が思い浮かびお念仏のお催促をいただいております。「慈光」も二十五巻になりました、皆様の御念力と諸先生の御加護に支えられてきました、この上にもよろしくお願い申上げます。

住田智見講師の句に

連れ多き 浄土の旅や 春の風

というのがありますが、一人一人が弥陀仏の真実心に帰しまつるところ、そこに釈尊は「親友」と仰せられ、観音と勢至の両菩薩は「勝友」と現れて下さり、祖師親鸞聖人は「御同行、御同朋」とかしずいて下さる。目に見えぬけれど見えるよりたしかに、狭い念仏の草庵に聖衆方がよき友となつて集うて下さるのであります。ここに三界孤独の身も賑やかな浄土への旅を辿らせていただき、灰色の砂漠の人生が花咲き鳥歌うて春の風と転ずる趣きがほのかに味わえるのであります、浄土の廻光の恵みであります。

近角先生のお講話は、極悪最下の私共が如來世尊から恵まれる無上大利の讃仰であ

ります。又白井先生も、柳瀬、高原の先生方も近角先生の御導きをうけられた方々で、年頭にお原稿をいただきました。夫々に念仏の燈炬を点せられつつ歩まれる信の旅姿をお述べ頂いております。

住田智見講師は、机上にいつも扶藁、隠逸伝をおかれて、世に出られないで念仏を内心に深くたくわえられた仏法者を御自身の鏡として念仏の道を進まれた方であります。そうした中からもれた法語を中島師が集録して下さった中から抄出させて頂きました。

木村さんも病弱、私と同年でありますが、この冬は日赤病院で精密検査をうけられながら念仏詩抄の集録整理をしていられます。やがて文昌堂から出版されることと存じます。

福島先生から歳末の所感を頂きました、そのお歌に

国をおもひ子等をおもひて迎り行く老の心を仏しろしめすとありました。「仏しろしめす」の一句、深く心に刻まれ、繰り返して誦しております。

いざさらば 雪見にころぶところまで

ばせを

# 御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。

市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル二軒目。

○毎月二十四日、午前、午後。昭和区小椋町、教西寺法話会。

市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。

定価 半年 四〇〇円(送共) 一年 八〇〇円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八 編集・発行人 花田 正夫

愛知県西加茂郡三好町大字福谷 印刷 人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八 發行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番 那便番号 四五七

慈光 第二十五卷 第一号 昭和四十八年 一月十五日發行(毎月一回・十五日發行) 昭和二十四年 七月 二十三日 第三種 郵便物 認可